

9月4日の黙想を受けて（[ここをクリックすると伝道者の黙想が開きます](#)）

（ヨハネの福音書 第8章 31～32節）

世の不自由のなかでの真の自由とは、どのようなものであろうか？主イエスが十字架にかかれたとき、身動きできない不自由の中で、父なる神の多くの人々を救われる愛のご計画の中におられた自由を想う。

9月8日の黙想を受けて（[ここをクリックすると伝道者の黙想が開きます](#)）

（マタイの福音書 第22章 37節）

いろいろなことがうまくいっているとき、父なる神の全知全能の力と私への愛に感謝し、自分も神を愛することができるような気持ちがする。しかし試練にあうときには自分は神に愛されてはいずれ見捨てられたのではないか、という思いに囚われてしまう。厳しい試練が起こることを許された父なる神を恨む気持ちが自分の心に現れてくる。私は「どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と十字架上で叫ばれた御子イエスの痛みと、父なる神が愛するひとり子を十字架におかけになった痛みを想う。ご自分の痛みを私たちも少しでもわかるように、愛するひとり子イサクをいけにえとして捧げるようにアブラハムに命令された父なる神を想う。私は主イエスの御前に静まることに集中する。いつか、私も神に無条件に愛されていることを心から信じて、その無条件の愛で神を愛し返す祝福をいただけることを信じて。

9月13日の黙想を受けて（[ここをクリックすると伝道者の黙想が開きます](#)）

（イザヤ書 第53章 2節 b）

十字架を背負ってゴルゴダに歩いてゆかれるイエスには、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもなかった。イエスの十字架が自分たちの救いにどうしても必要であることを知らなかったとき、私たちにはイエスが無力に思えた。その無力さにこそ、多くの人たちを救う無限の力があつた。私たちも自分たちの無力さを知り静まるとき、私たちのうちにおられるイエスが無限の力で私たちの体を動かしてください。